

著者は眼科専門医であり、われわれの有力な仲間である。日常の多忙な診療の合間をぬって、民俗学的ないし医史学的なフィールドワークを精力的に行って、多岐にわたる成果をあげている。その一端として民間医療信仰について調査し、昭和六十二年から足かけ三年間にわたり、京都府保険医新聞に連載してきた。これを整理補足して第23回日本医学学会総会を前にした本年三月、思文閣出版から刊行したものである。

一概に京都には約千五百の社寺があるといわれる。その大部分が平安建都以来の長い歴史のなかで、人々の信仰をあつめてきた。著者はこのうち特に医療信仰に着目して、神社、寺院、地藏、観音、石や池泉等の自然物をもふくめた信仰対象について詳細に調査解説している。

本書の内容をみると、始めに、信仰と医療、日本の神々、さらに信仰の成立過程から御霊信仰、薬師信仰と観音信仰、稲荷信仰と地藏、道教の信仰等について一般論を述べている。ついで京都市の地区（西京区、右京区、中京区、下京区、東山区、左京区、北区、上京区、伏見区、山科区、南区）にわけて、総数一七五の社寺等を取りあげている。例えば、東山区、仲源寺（目疾地藏）——眼病平癒として、その条下で寺伝、民俗誌等から引用し解説を加え、現状については著者の現地探訪記を載せている。

最後に、散歩のおわりにと題して、医療信仰の対象と内容、現

代の信仰について著者の見解、結論を述べて終っている。

一般に一社寺毎の御利益は一項目とは限らないので、一七五の社寺の各利益の累計は三三三となっている。その内訳をみると、安産五四、諸病平癒四二、悪疫除け二一、子授け二〇、歯痛一三、厄除け一一、眼病一一となっており、これを科別にみると、産科二・四％、内科一九・六％、小児科五・八％、婦人科四・九％となっており、産婦人科領域が最も多い。

医学史をひもとけば、原始的医療の発達段階においては、経験的医療と巫術とが車の両輪として数千年の間、大きな要素をなしてきた。『医心方』巻一、諸病不治証第二の条下に、『史記』扁鵲伝から引用して、病の六不治を述べている。その一つに、巫を信じて医を信ぜざる事を不治の一つにあげている。現在巫のみに頼って医にかからない人はいないと思う。著者は眼科の立場から目疾地藏（東山区四条大和路東入ル）について特に詳述している。

私もこの目疾地藏については実に不思議な靈験を体得し、今もその門前を通る時は、中に入って、臉の腫れあがった様に見える地藏を拝むのを例としている。この様なことは多くの人々が体験していることであろう。

著者が最後に述べているように、民間医療信仰を科学者の目をもって見なおすとき、人間的な巾の広さ、或は医療施術者であれば、全人的な医療を行うことができる一助となると私も考える。

本書は京都市内の医療信仰のみについて記述されているが、このような例は夫々の土地に根づいて存在している。医史学研究者はいま一度原点に立ちかえる意味において、また一般市民の方々

には心の安らぎを得るためにも、本書の一読を切望する。

(杉立 義一)

〔思文閣出版・千六〇六京都市左京区田中関田町二一七
番〇七五―七五―一七八一、一九九一年三月・A5判
・三二六頁・二、八八四円〕

会員通信

『日本医史学雑誌』投稿論文の
訂正と追記に付いてのお願い

中山 沃

『日本医史学雑誌』第三八巻第一号に掲載された私の論文「備前蘭学の開祖児玉順蔵と漢蘭折衷医難波抱節」の訂正と追記をお願いします。

一、訂正

一〇五ページの本文（表題と著者名を除いて）の五行目「玄真の高弟……」を「大槻玄沢の高弟……」と訂正してください。

二、追記

右の論文の投稿後、箕作阮甫の「西征紀行」の中に児玉順蔵についての記載があることを知ったので、下記の文章を追記して頂きたい。

ロシア使節応接のため長崎へ出張を命ぜられた勘定奉行川路左衛門尉に随行し「藩書和解御用手伝」に任ぜられた箕作阮甫は門人武田斐三郎らを伴って、嘉永六年（一八五三）十月三十日に江戸を出発した。この長崎への旅行記が「西征紀行」である。この紀行の中で、阮甫は十一月二十一日、岡山で児玉順蔵に会ったことを次のように記している。

「藤井等を過ぎて岡山に達すれば三時余なり、児島淳蔵（児玉順蔵の誤り）といえる者は伊木某の医なるよし、嘗て東都へも音問を通ぜしものなればか、謁を通ず、黄昏来るべしと約し、川路君に謁し、帰りに斐三郎と一盃を傾けし比来りぬ、天文・地理・炮術に通ずるなど自慢し、自ら或いは謙抑し、言う所虚偽に過ぎず、斐三郎、狂人なるべしと目ししは悞（誤に同じ）らざるべし、又菓子、肴核を贈る、酔を尽くして寝ぬ」

△文献▽

木村岩治編「箕作阮甫、西征紀行、幕末の日露外交」津山洋学資料館友の会、一九九一（平成三）。